

1

上映者たちの言葉

2020年12月16日

「全国コミュニティシネマ会議2020」
プレゼンテーション

1 | ミニシアター

シネマ・アイリス(北海道函館市) | 菅原和博

いまだからこそ、何か、函館から発信したい。25周年記念映画をつくろう！

映画館の状況は、他の映画館とほとんど変わりません。

ただ、函館は人口が26万人くらいなので、そもそも、ミニシアターを維持していくのは厳しいところがあります。しかし、それでも市民のみなさんに支えられて24年、来年で25周年になりますが、ここまで営業してきました。

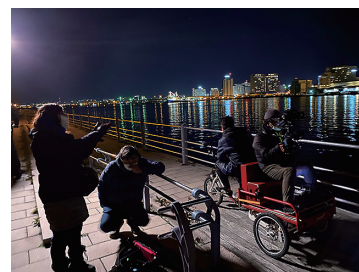
シネマ・アイリスの特色として、映画を上映するだけでなく、映画の製作もしていることがあります。2010年から、函館出身の作家である佐藤泰志の小説の映画化に取り組んでいます。この10年間で4本の映画を製作しました。最初に撮影した『海炭市叙景』(2010)が、コミュニティシネマセンターのシネマ・シンジケートプロジェクトのバックアップのもと、日本全国のミニシアターで上映され、好評をいただきました。この成功が製作を継続することにつながり、2014年に『そのみにて光り輝く』、2016年『オーバー・フェンス』、2018年『きみの鳥はうたえる』と、4本の映画を製作してきました。

2021年のシネマ・アイリス25周年に向けて、2020年1月に新たな映画製作の計画をスタートし、脚本作り等を進め、当初は2020年9月から撮影を始めようと思っていました。しかし、コロナの感染が拡大、緊急事態宣言が出され、このコロナ禍で映画を作るべきかどうか、休館期間中に大変悩みました。

映画館にできることは、映画を上映することなのですが、上映する映画を作ることも、我々に課せられているとも思います。函館は観光都市なのですが、コロナ禍で市街地は寂れて死んだようになっていました。いまだからこそ、何か、函館から発信したいと考え、映画製作を進めることに決めました。

そして、2020年11月、ようやく新しい映画『草の響き』がクランクインしました。監督は斎藤久志、11月5日から23日まで、3週間弱の期間で撮影を行いました。現在編集中で、2021年4月の完成を目指しています。秋には全国のミニシアターで上映していただければ幸せだなと思っています。

はからずも、この映画のテーマが、コロナ禍の状況をどこか感じさせるような部分があります。あまり詳しいことはお話しできないのですが、ご覧になっていただければ勇気づけられるかなと思っています。ぜひまたお力添えをお願いします。



上から

シネマ・アイリス | ロビー
『草の響き』撮影風景

フォーラム(東北) | 長澤純

自粛期間中にかえって映画館の大切さに気づいた人は多いと思います

フォーラムの現状については、『そして映画館はつづく』(フィルムアート社)で妹の長澤綾が書いています。この時も妹に出てもらった方がいいのではないかと思います。ミニシアター的な視点ではなく、シネコン的な

視点も持っているフォーラム独自のポジションから話してほしいということで、今日は私が出ることになりました。私はフォーラムでメジャー系配給会社の作品と、フォーラムネットワーク全体の経営を担当していますので、この2点についてお話しさせていただきます。

ハリウッド・メジャーの動向と配信

まず、初めにメジャー系についてですが、ハリウッドの現状は非常に深刻で、アメリカの地方シネコンが破たんし始めています。この状況が解消されても、製作・配給・興行に甚大なダメージが残るのではないかと心配しています。そんな中、ワーナーが9月に『TENET テネット』を公開し、12月に『ワンダーウーマン 1984』を公開するのは大英断で、世界中の興行関係者がワーナーに感謝の念を抱いています。『ワンダーウーマン』についてはアメリカ国内では配信(HBO Max)と劇場での公開が同時にスタートすることになりました。この動きは他のメジャースタジオでも続くと思います。アメリカ国内のHBO Maxの会員は860万人ですが、ディズニープラスは8600万人、ネットフリックスは1億9000万人です。ユニバーサルは、大手映画館チェーンのAMCに続いてCinemarkとカナダのCineplexとも、「公開17日間を映画館で、その後は配信(VOD)で」という契約を結びました。興収が5000万ドルを超えた場合には、配信は31日後に自動的にスライドしますが、日本でもその考え方がスタンダードになってしまうのではないかと心配しています。VPFが終了したので、公開-配信のスピード感が上がるのは間違いありません。

配信は、最近、日本でもかなり普及して、『鬼滅の刃』や『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』などのヒットにも寄与していると思いますが、配信のよさと劇場のよさはそれぞれにあり、これからも共存していくと考えています。配信は「おうちの余暇」であり、劇場は「お出かけイベント」です。映画ファンほど、両方をうまく使い分けています。自宅で2時間集中するのは難しく、自粛期間中にかえって映画館の大切さに気づいたという方は多いと思います。また久しぶりに映画館に行ったときに、特に音響の素晴らしさを再発見した人は多いのではないのでしょうか。

夏の第2波の中でも邦画の若い人向けの映画は好調でした。冬の第3波の中でも、世代を問わず劇場に人が戻ってきている感触があります。コロナに対するひとりひとりのスタンスが固まってきており、「映画館は気をつければ安全な場所」と考えるお客様が、ニュースの動向に左右されずに通ってくださっています。興行場法に定められた厳しい換気基準が映画館を救っており、また世界中どこにも映画館でクラスターが発生したというニュースが今のところないことも、この状況を後押ししています。ただし、80歳以上の高齢者や、障がい者の方は戻ってきていません。また、一番戻ってきていない客層は、実はファミリー層ではないかと懸念しています。

フォーラムの経営

フォーラムは、東日本大震災のときに会社の存亡に関わる危機を経験しており、今回は二度目の危機という認識です。原発事故の後、福島市内の水道から放射性物質が検出され、福島にはもう人が住めないのではないか、と覚悟しました。仙台は身近な人を亡くした人が多く、劇場再開後も、特にアート系の映画はしばらくお客様が戻りませんでした。その当時、フォーラムの経営は運転資金を持たず、月末の支払いが終わるとすっからかんという「江戸っ子的な社風」で、すぐに資金ショート状態となりました。デジタル化の投資も重なり、借りても借りてもお金がなくなることが続き、2011年の秋ごろにフォーラム各館の支配人を集めて非常事態宣言をしました。会社の存続のため、徹底した経費節減をし、それがきっかけで社内の衝突が増え、辞める人が続出しました。フォーラムの歴史の中で最も暗く苦しい時代です。今回はそのときの経験が生きていて、運転資金の持ち方や、銀行との信頼関係の築き方など、あのときよりもずっとうまくやるができています。今回は、雇用調整助成金という制度もあり、従業員との信頼関係を壊さずにここまで来られたことは幸運なことです。

震災のときに本当に困ったのは、震災後1年以上続いた作品不足でした。今回もその心配はあります。長期戦を乗り越えられるかどうかは、業界全体が一枚岩になれるかどうかだと思います。コロナはいずれ必ず終息します。そのときを信じて、今回も乗り越えていきたいと思っています。



上から

フォーラム山形 | 外観
フォーラム仙台 | 受付

シネマテークたかさき/高崎電気館/高崎映画祭(群馬県高崎市) | 志尾睦子

自分たち自身が少しでも楽しく仕事をするのが大切だなと思っています

NPO法人たかさきコミュニティシネマは、事業として、映画館「シネマテークたかさき」と「高崎電気館」の運営、撮影現場のお手伝いをする「高崎フィルムコミッション」の運営、さらに、「高崎映画祭」の事務局もやっています。

シネマテークたかさきは、2004年に設立して、12月4日で17年目に入りました。58席と64席の2スクリーンでやっていますが、今回、初めて「休館」を体験して、本当に潰れるんじゃないかという気持ちになりました。ミニシアター・エイド基金やSAVE the CINEMAプロジェクト、いろんな活動に励まされて、ここまでやってこられたというのが正直なところ。現在も、座席は50%にしたままでやっています。シネマテークたかさきは、もともと銀行だったところを映画館にリノベーションしたのですが、ロビーが狭く、入れ替え時などどうしても「密」になってしまう、プログラムを調整して入れ替えの時間を長くしても解消は難しいということで、スタッフと話し合っ、再開したときに予約制を取り入れることにしました。一応、インターネットで予約ができるんですが、チケット代は受付でお支払いただくというネットとアナログの混合型で、受付で時間がかかることもあって、50%のままにしています。

再開後、満席になることはほとんどなく、入場をお断りすることはありませんでしたが、10月末に公開した『スパイの妻』は、群馬県庁でも撮影をしたこともあり、とても好評で、土日でも平日も満席の回が続きました。満席といっても50%で29席なんです。50%のままでいいんだろと思っていた矢先に、満席が続くということがあり、配給会社から「他の映画館は100%でやっているのになぜ開けないのだ」と言われ、私たちも理由を説明してはいるのですが、配給会社からはせっかくの機会を逃していると言われて、悩みました。理由があって50%にしていたものを、入っているから急に100%にしますということもできず、取りあえずはご理解いただきましたが、このまま(50%)にしていると配給会社から映画を出してもらえなくなるのではと心配したりもしました。こういうこともきちんと配給会社と話をし、理解をしていただいた上で進めなければいけないんだと実感しました。現在のような状況の中で、席数100%にするにはどういった対策を講じておく必要があるのかを考えて、オンラインのチケット発券(販売)システムの導入を準備しています。

席数50%にしていますが、ゲストでこられた監督さんなどには空いている席に座っていただくこともあります。こういうことやマスクの着用のこと、飲食のことなどで、お客さんもスタッフも殺伐してしまう場面もあります。お客様同士でもトラブルになりそうになったり、スタッフもいろいろなことで気を使っている上、マスク越しの対応で、丁寧に話をするのもままならず、ギスギスしているのを感じることもあります。いままでなかったようなクレームが入るようになったり。そういうところの難しさも感じていて、常連の方に「最近、ちょっとシネマテークは暗いよ」と言われて、また、暗くなったりしています(笑)。

高崎電気館は、高崎市が所有する映画館で、私たちが運営管理をしています。こちらは大きな映画館なので、現在は265席を100席限定にしています。感染症対策も群馬県のガイドラインに準拠してやっていますが、消毒液やパネルの設置など、すべて高崎市で準備をしてくださっています。

高崎フィルムコミッション

映画館のほかに、撮影を支援するフィルムコミッションの運営も行っています。映画館が休館になったときには、映画の製作もストップしてしまうのではないかと心配しました。実際、高崎フィルムコミッション関係でも、3-5月、あるいは夏以降にクランクイン予定だった映画の延期や中止といった話が次々に入ってきました。けれど、撮影現場は復活が早く、5月半ばぐらいからテレビドラマやネットドラマが動き始めて、7月には映画も動き出し、本格的に撮影が再開しています。隣の茨城県は現在も完全に撮影の受け入れをストップしているのですが、群馬県は、2週間に1度PCR検査を受けるとか、きちんとした感染症対策をした上で、撮影を受け入れる姿勢を示しています。ただ、大規模撮影に関しては来年以降に延期というのがほとんどで、



上から

シネマテーク高崎 | 受付
高崎電気館 | 劇場内

まずは5000万円以下の企画が動き出しているのかなという感じがします。最近の製作現場には、コロナ対策専属プロデューサーがいて、クルーが入る前日とか2日前にいらして、現場の換気等の状況をチェックされています。

高崎映画祭

高崎映画祭は、例年3月下旬から4月上旬に開催しています。今年(2020年)も3月21日から開催予定だったのですが、コロナ禍が厳しくなってきたので、22日に、無観客・インターネット配信で授賞式だけやりました。そのときは、まだギリギリ、受賞者に高崎に来ていただくことができましたが、23日以降に感染者が増えて、1週間ずれたらできなかったねという話をしました。34回という数字はかろうじて刻みましたが、予定していた上映プログラムはすべて中止になりました。

映画祭も含め、映画の状況がこの一年で様変わりしたなと思いますが、映画を届ける立場にいる私たちがギスギスしていたり、大変だ、大変だという気持ちでいると、それがお客様にも伝わってしまいますし、自分たち自身が少しでも楽しく仕事をするのが大切だなと思っています。

ユーロスペース(東京・渋谷) | 北條誠人

多くの人たちの思いを、日々上映する私たちがどうやって返していけるのだろうか

私自身も参加しているSAVE the CINEMAでは、まず、国や政府にミニシアターに対する支援を要請することへの賛同を求める署名活動を行いました。そこに署名してくれた9万人を越える方々おひとりおひとりのミニシアターに対する思いを受け取りました。また、ミニシアター・エイド基金では、全国のミニシアターを支援してくださり、助けられました。それぞれの活動が始まる前までは、多くの人の頭の中ではミニシアターなんて、隅っこの方についてしまっているんじゃないかという思いが正直なところありました。ところがいざ蓋を開けてみると、これだけ多くの人たちが私たちのことを応援してくれているということがわかり、大変驚きました。その多くの人たちの思いを、日々上映する私たちがどうやって返していけるのだろうか、と考えています。

ユーロスペースでは、オンライン・コミュニティ「ミニシアタークラブ」というプロジェクトを始めます。こちらの企画は、文化庁の「収益力強化事業」という支援事業に採択された事業です。企画を進めていく中でわかってきたのは、「ミニシアターの歴史」というのは、人によって本当にそれぞれにあって、ひとつにまとめられるものはないということです。これを機に、私よりも若い世代の人たちと一緒に、自分なりの「ミニシアターの歴史」を、少しずつまとめていく作業をやっていこうと思っています。Z世代、ミレニウム世代と呼ばれる若い世代に、どのようにミニシアターの魅力を伝え、映画館に足を運んでもらえるような道筋を作っていけるのかを考え、深めていきたいと思っています。また、SAVE the CINEMAのメンバーに入っていない、アート系映画の配給会社の人たちと、ミニシアターのあり方について一緒に探っていきながら、「ミニシアター文化」というものを少しずつ継承し、次の世代につなげていくことも考えながら、プロジェクトを準備しています。

もうひとつ、ユーロスペースと名古屋と大阪のミニシアター3館で、ドキュメンタリーを作ろうと考えています。コロナ禍では様々なことを、いろいろな作り手が考えたと思います。私たちは、ある監督に「コロナということに縛られず、この1年間ぐらいの間に思ったり考えたりしたことを、一本のドキュメンタリーにしてもらいたい」と提案しました。私たちは映画制作に関して具体的なノウハウはありませんので、外から2人のプロデューサーに入ってもらい、動き始めたところです。来年1年かけて準備し、再来年撮影、その次の年に完成した作品を上映することになります。



上から

ユーロスペースが再開後に上映した『希望のかなた』
ユーロスペース | 映画館入口

シアター・イメージフォーラム(東京・渋谷) | 山下宏洋

「上映」とは何か、を考える一年になりました

イメージフォーラムは、渋谷でミニシアターとしてやっていますが、きょうは、劇場というよりも上映団体という視点からお話をできればと思います。お客さんが減って厳しいという話はもうたくさん聞かれていますと思いますが、そういう中、ミニシアター・エイド基金や仮設の映画館、SAVE the CINEMAといった動きが、大変心強かったです。どれくらいの反応があるのか気になっていましたが、たくさんの応援の声やポジティブな反応があり、ミニシアターという場所が、多くの人にとって大事な存在なのだとことを改めて感じる機会になり、私自身にとっても大変大きな意味を持ちました。自粛要請があり、どうしたものかと思っていたときに、「仮設の映画館」という試みが出てきたことは、非常に頼もしく思いました。監督と配給会社が、この状況を前向きに捉えて何かできることはないかと考えてくれて、こちらも頑張っていかなければ、と改めて思いました。

しばらくは数字的に厳しい状態が続いていたのですが、8月1日から座席を50%の状態で開催したワン・ビン監督の『死霊魂』という8時間半の映画は、満席が続き、多くの人に見ていただきました。やっぱり、こんなときでも映画を見たいお客様がたくさんいるのだということを改めて体感しました。

サブスクリプション型の配信など、様々な映画の見方が出てきている中で、「上映」というものが改めて問い直されているのではないかと考えていた時期に、このコロナが重なり、本当に「上映」とは何かを考える一年になりました。

イメージフォーラム・フェスティバル

私たちは、「イメージフォーラム・フェスティバル」という映画祭もやっています。2020年で34回目となります。実験映画を中心に、コンペティションや関連イベントを実施しています。もともとは4月開催の予定でしたが延期になり、9月に開催することになりました。映画祭なんて実施できるのかという状況の中で、準備を進めていました。

今回は「上映」をテーマにすることにしましたが、コロナ禍の中で「上映」をテーマにして実施することがどうなのかと悩み、最終的に「“オン・スクリーン”上映について」というテーマに決め、上映について考えるプログラムにしました。

上映活動というのは、政治的な運動も含め、歴史的にも様々な人たちがやってきましたが、いま、かなり自由に、自身で権利処理をして上映する人たちが出てきています。フェスティバルでは、「スクリーニング・コレクティブ新世代」として、彼らに作品を選定してもらい、上映とシンポジウムを行いました。シンポジウムでは、彼らにとっての「上映」の可能性について話してもらいました。彼らの話は非常に画期的で、SNSの関わり方や宣伝方法など、多岐に渡るテーマで話が盛り上がり、私自身も非常に刺激を受けました。

ミュージシャンに演奏してもらいながら映画を上映するライブ上映も行いました。会場であるスパイラル・ホールでは、座席数を3分の1にしましたが、席はほとんど埋まりました。また、渋谷に新しくできた「スクランブルスクエア」という大きなビルの屋上を利用した「IMAGE FORUM FESTIVAL in the SKY」という野外上映も実施しました。映画の上映自体が難しい中、野外で実験映画を上映することでイメージフォーラム・フェスティバルのいつもの観客とは違う人たちにも映画に触れてもらうという意味合いが大きかったのですが、多くの人に来ていただくことができました。

イメージフォーラム・フェスティバルは、映画館の運営とは違い、東京都や芸術文化振興基金、各国の大使館等から助成を受けて運営しています。映画館の状況とは違いますが、ポジティブに何かできることはないかという気持ちでやり、手ごたえを感じることができました。来年以降もこういった試みを続けていきたいと思っています。



上から

イメージフォーラム・フェスティバル | トークの様子
渋谷のビルの屋上で行われた屋外上映

Bunkamura ル・シネマ(東京・渋谷) | 野口由紀

若年層やシネフィル層を意識し、旧作上映を例年より頻繁に行おうと考えています

コロナの影響が出始めてから休館まで

2020年は、1月31日からクロード・ルルーシュ監督の『男と女 人生最良の日々』を公開し、シニアのお客様で満席続出のスタートで、よい1年の始まりでした。1月に日本で初めてコロナウイルスの感染者が確認されたときは、映画関係者を含め、多くの方が自分事と感じていませんでした。2月にベルリン国際映画祭があり、ほとんどのバイヤーが例年通り参加し、私も上司と一緒に参加しました。日本から送られてくる劇場の日報を見て、最初にコロナの影響を感じたのが、2月22日の天皇誕生日を挟む3連休でした。2月21日に小池都知事の会見があり、横浜ではクルーズ船で死者が出て、都内のイベントを中止・延期するという発表がありました。『男と女——』は、80代のお母さんと60代の娘さんが一緒に来るような超シニア型の作品だったので、かなり早めに影響が出ました。

2月26日にイベントの中止・自粛の要請があり、Bunkamuraは、ル・シネマも含めて全館2月28日から12日間休館しました。28日からラジ・リ監督の『レ・ミゼラブル』を上映する予定でしたが延期となりました。有楽町や新宿では、予定通りに公開し、満席も出ていて、この頃はまだ、シネフィルや若いお客さんが動く作品は盛況という状況でした。

3月末から4月初頭にかけては、東京都の夜間・週末の外出自粛要請に従って休館を繰り返し、緊急事態宣言で4月7日から65日間全館休館となりました。

営業再開

都内の多くの映画館は、シネコンもミニシアターも6月1日～5日頃に再開しました。ル・シネマは複合文化施設なので、美術館や飲食店と足並みを揃えて6月11日に営業を再開しました。19時台は休映、客席の間を2席開けた形で再開し、6月19日からは新作が2本始まったこともあり、他の映画館と同様に1席おきの市松模様の座席で、夜の上映も再開しました。この頃、ユーススペースでは『はちどり』が大ヒットしていて、ヒットする作品はヒットするんだなと感じました(笑)。『はちどり』に入れなかったからル・シネマに来たというお客さんもいる時期でした。

女性やシニアのお客様の出控えが激しいと感じていましたが、お盆休みの『ポルトガル、夏の終わり』頃から、その層も戻ってきて、ル・シネマは150席と126席なので、50%キャパでは満席も出るようになってきました。9月に入ると先売りも再開し、9月4日に『バヴァロッティ 太陽のテノール』を公開、シニアもたくさん来て、50%キャパですが、満席が続きました。シルバーウィーク(9月19日)から全席販売を再開しました。シニアのお客様は一席おきの座席に慣れていたので、満席となると来場を控える人も多く、50%キャパを継続したほうが入ったのかなという手応えもありました。とはいえ、渋谷のホワイトシネクイントで9月4日にスタートした『mid 90s ミッドナインティーズ』は、若いお客様で100%席開放でも満席が出ていたの、やはり作品によるかなと思います。

11月25日に都知事の会見で飲食店の営業時間短縮が再び要請され、そこからまた客足に影響が出てきました。12月4日に公開した『燃ゆる女の肖像』『ヘルムート・ニュートン——』は、本来であればシニア層も来てくれる作品ですが、朝よりも午後の方が入るという状況が続いています。

ル・シネマでは、ロビーに検温カメラを導入しました。チケットも、オンライン予約の場合はQRコードでチケットレスで入場可能になっています。コロナとは関係なく2年前に導入したのですが、チケットレスにしておいてよかったと感じました。営業再開後は、窓口でチケット購入のお客様にはカウンターで連絡先を記入していただいていたのですが、シルバーウィーク以降はオンライン上に連絡先記入フォームを開設して、希望者のみ入力していただくようにして、クラスターがあった場合に連絡が取れるようにしています。

ル・シネマで上映する作品はほとんど1年先まで決まっていることが多く、2020年の上映作品はコロナ前



ル・シネマ | ロビー

に編成していたので、苦戦を強いられました。旧作の限定上映であれば比較的柔軟に世情に合った作品を編成できるので、11月27日から急遽企画した石岡瑛子の映画衣装特集を行いました。同時期に東京都現代美術館で石岡瑛子展が始まり、そちらのお客様にも来ていただくことができました。40-50代の女性層が出控えているとはいえ、アクティブな人もいますので、そういう層を取り込み、『ヘルムート・ニュートン——』や『燃ゆる女の肖像』など親和性の高い待機作品の予告編やチラシでつなげるようにしています。

2021年に向けて

2021年の番組編成に関しては、フランス等の映画館の休館が続いている状況も関係して、公開日の変更や延期が複数出ています。渋谷エリアの映画館では、シアター・イメージフォーラムで上映されるシネフィル向けの作品はよく入っているので、私たちも、若年層やシネフィル層を意識し、旧作上映を例年より頻繁に行っていこうと考えています。若手スタッフからも面白いアイディアが出ていますので、それを実現しようと準備しています。

横浜シネマ・ジャック&ベティ(神奈川県横浜市)| 梶原俊幸

2021年12月21日、ジャック&ベティは30周年を迎えます！

コロナの状況における集客については大体皆さんと同じような感じで、4-5月はお休みして6月に再開した時点では5割くらい、8月から秋にかけて7割くらいまで戻っていましたが、12月に入ってまた少し下がっているかなという感じです。

コロナ禍において、ジャック&ベティ独自に行ったことをご紹介します。休館中に、ジャック&ベティ応援商品の販売を始めました。再開したら使える前売券+スクリーンにお名前を表示+お礼のポストカードを3000円で販売しました。4月7日に販売を開始して、4月20日までの約2週間で2000名以上の方にお買い求めいただきました。休館中のこの収入はとてもありがたかったです。ミニシアター・エイド基金やSAVE the CINEMAプロジェクト、仮設の映画館などのご支援にも助けられています。

当館では、インデペンデントフィルムフェスティバルという映画祭を毎年やっていますが、その中で上映している作品を有料配信して、手数料を引いた分を映画館と制作者で分配するという取り組みも行いました。また、4-5月の休館中には、注意や配慮をしてもらいながら、劇場内で映画撮影をしました。その中の1本『シュレーディンガーの猫』は、先日、インディペンデントフィルムフェスティバルでお披露目上映をさせていただきました。

再開後、お客様に安心して来てもらうための対策として、7月末からオンラインでのチケット販売と指定席制を始めました。劇場の入り口に発券機を置いて、ちょっと狭いのですが、チケットを発券できてクレジットカードや電子マネーで購入することができるようになり、多くのお客様が利用してくださっています。客席半数制限をした状態でこのシステムを導入したのですが、10月からは全席販売することになり、空き状況を把握できる形で販売しなければならないということで、当初は設けていなかったモニターを設置して、空いている席を選ぶことができるようにして、これも好評です。

また、イベントもいろいろやりました。「Help! The映画配給会社プロジェクト」が、6月にスタートして、配給会社ごとの作品の配信が始まったときに、それに合わせてイベントを開催しました。オンラインで配給会社の代表に出ていただき、作品や配給会社のことを話していただくという企画です。これまで、配給会社の方のお話を聞く機会はほとんどなかったのですが、映画の買い付けやゲストの招聘の苦勞など、映画が映画館に届けられるまでのいろいろな話を聞くことができました。参加者からも、作品により愛着を持つことができたという好評で、配給会社の方のお話を聞いて感銘を受けたという人から「求人はいらないんですか」という質

問も出ました。コロナ禍があったからこそ実施した企画ですが、今後も続けていきたいと思っています。人材の掘り起こしにも意外と有効なのではと感じました。

毎月実施しているジャック&ベティサロンというお客さんとの交流会も、4-5月はお休みせざるをえず、6月はオンラインで実施、7月からは会場参加は10名限定にして、オンラインでも参加もできますという、ハイブリッドで開催しています。以前、ジャック&ベティサロンに中国から来た留学生が参加してくださっていて、その後中国に戻られていたのですが、その方が中国からオンラインで参加してくださるようになり、インターナショナルになったかと、こんな可能性もあるのかと感じています(笑)。



横浜シネマ・ジャック&ベティ
韓国・仁川と高崎をつないだオンラインイベントの様子

韓国・仁川との交流企画

それから、ジャック&ベティでは、昨年韓国仁川にあるミルム劇場と交流していて、2019年は6月に我々が仁川に行き、9月には仁川の方たちに横浜に来ていただいて交流企画を開催することができました。今年も企画を立てていたのですが、リアルな交流が難しくなって、ではオンラインで交流しようと「仁川インディペンデントフィルムツアー」という企画をミルム劇場から提案していただき、11月14日に、ミルム劇場とシネマテークたかさき、ジャック&ベティの3館で、ミルム劇場がセレクトしたインディペンデント映画のオムニバスを同時上映して、ミルム劇場にいる監督たちのトークを各劇場で聞いてQ&Aを行うという企画を開催しました。こういうことも、コロナでオンラインイベントに取り組むようになったからできるようになりました。

来年2021年12月21日にジャック&ベティは30周年を迎えます。

30周年企画として『誰かの花』という映画を横浜出身の奥田裕介監督に撮っていただくことになり、俳優のカトウシンスケさん、高橋長英さんが出てくださることになりました。12月7日にクラウドファンディングがスタートしましたので、ぜひともご支援をお願いします。『誰かの花』は、30周年を迎えられたとしても迎えられなかったとしても全国の映画館に電話をして上映していただいけませんかという、かなり断りづらいお願いをするかと思っていますので、そのときはぜひご協力いただければと思います。

今回、コロナの影響の中で、いろいろな形でご支援をいただきました。今後、また事態が悪化したときに、また助けてくださいと言っても、同じようにご支援いただくことは難しいと考えます。映画館でできるニューノーマル、新しい時代を見据えた取り組みをしなければいけないんじゃないかなと思います。



上から

ほとり座(移転前) | 外観
移転後のほとり座 | ロビー

ほとり座(富山県富山市) | 田辺和寛

映画を見るだけでなく、体験するという付加価値も模索していきたいと思います

「ほとり座」は2016年11月、富山市の中央通りにオープンしました。中央通りは、富山市内の中心市街地として栄えたアーケード通りですが、現在は店舗の3分の1以上が閉まってしまったシャッター街となっています。ほとり座は、カフェも兼ねた20席ほどの小さなミニシアターとしてスタートしました。上映中も飲食可能で、映画だけでなく、ライブイベントやトークショーなども行う複合施設として営業していました。じわじわとお客様に愛されるようになり、2018年度は年間6千人、2019年度には8千人と、着実に来場者数を伸ばしていました。店舗が小さかったので、街なか以外にも出向いて出張上映会を行ったり、大型文化ホールとのコラボレーション企画をやったりしながら、事業を拡大していきました。

2020年初頭、かつて公設民営の映画館「フォルツァ総曲輪」として運営されていた場所に「ほとり座」を移転することが決まり、2020年6月20日に新しい映画館で上映を再開しました。もともとは4月再開を予定していたのですが、コロナの影響でオープンが大幅に遅れてしまいました。一時期は再開そのものが危ぶまれたのですが、何とかオープンすることができました。

ここには、映画館とライブホールが入っています。映画館の座席数は92席、DCP対応のプロジェクター、そして、音響設備には7.1chのスピーカーを導入しています。

オープンした6月末から7月にかけては、ほとんど観客が来ない状態が続きましたが、8月中旬ごろから少しずつ来るようになり、月千人を超えることができました。11月まではそのような状態が続いていたのですが、感染の再拡大の影響で、現在はその半分近くまで減少している状況です。

近くにあるシネコン「JMAXシアター」の方によると、シネコンも『鬼滅の刃』以外の作品は動員が厳しい状態が続いているとのことでした。しばらく忍耐の時期が続くのではと思いつつ、感染防止対策には手を抜かずに頑張っています。富山は、地方都市としては少し珍しいかもしれませんが、ミニシアターとシネコンが中心市街地の徒歩5分圏内にあります。JMAXシアターと共同でコラボ上映会をしたり、舞台挨拶を共有したり、今後は協力しながら広報活動を行うなど、ともに街の中に文化を発展させようと考えています。

街としては少しずつ明るい方向に向かっているのかなと感じてはいますが、コロナでシニア層の動きが圧倒的に悪くなってしまったので、映画館で映画を見る楽しさを伝えることがまだまだ必要なかなと思っています。学生たちのボランティアやワークショップなど、ただ映画を見るだけでなく、体験するという付加価値を加えるやり方もどんどん模索していきたいと思います。



移転後のほり座看板

シネモンド(石川県金沢市) | 土肥悦子

子どもたちに映画館体験、ミニシアター体験を！

シネモンドでは、3月から8月まで、1ヶ月の売上が前年比で最大70%近いマイナスとなりました。これまでに、持続化給付金、雇用調整助成金、家賃補助、休業要請協力金など、ほとんどの給付金、補助金を申請して支援を受け、銀行の特別貸付も活用しました。また、休館してすぐにオンライン支援チケットとグッズの販売を始め、クラウドファンディングも始めました。クラウドファンディングの目標額は500万円でしたが、最終的には860万円のご支援をいただきました。ミニシアター・エイド基金の支援金もあり、休館中もスタッフをやめさせることなく、アルバイトには100%のバイト代を支給することができました。

今回クラウドファンディングをやってみて感じたのは、ご支援いただいたのは「顔の見えるお金なのだ」ということで、本当にありがたかったです。皆さん「あの暗闇をなくしたくない」とか「映画館は自分の人生にとってとても大切なものだ」とおっしゃってくださいます。でも、いまは映画館にはいらっしやらない。そこにすぐ矛盾のようなものを感じました。映画館には来られない人たちが、クラウドファンディングにご自分のお金を寄せてくれたのは「記憶」があったからだと思います。暗闇で映画を見るという体験の記憶をみんなが持っていたから、あれをなくしたくないと思ったんだと思います。

先日、日本大学芸術学部映画学科で授業をしたときに、学生たちに「映画館体験」を聞いてみました。一昨年ぐらいは「映画館は自分の居場所だった」とか「映画館は家庭からのシェルターだった」というような答えが返ってきたんですが、今年は「隣に座った人がボックスティッシュを持って泣きながら映画を見ていた」「体感できる映画館が凄かった」などアトラクションとしての映画館体験を話す人が多くなっていました。彼らの映画体験の基本は配信なんだと感じさせられました。たくさん映画を見る人ほど配信で見ているんだと。映画館に行くということは、単に映画をみるというだけではなく、エンターテインメントとか何か別のものを期待しているんだと知り、少しショックでした。

「あの暗闇」と言ったときにすぐ思い浮かべられるあの感覚というのは、体験していないと伝わらないと思うんですね。それでどうしたらいいんだろうと考えていて、私は、シネモンドとは別に、もうひとつ「こども映画教室」というものをやっているのですが、「こども映画教室」に参加した子どもたちは、自分たちが作った映画を映画館で上映するまでを体験するので、必ず映画館に行ったら映写室を見るようになるし、映画館の暗闇の記



「ミニシアターツアー2020」に参加した子どもたち

憶をもつことができます。つまり、子どもの頃に、映画館、ミニシアターを知ることが大切で、だったら、自分たちだけで映画館に行くことができない子どもたちを映画館に連れてくればいいんだと思いました。

休館中に「ミニシアター・ツアー2020」という企画を考えました。ミニシアターパークの俳優の皆さんにも協力していただけることになり、文化庁の文化芸術収益力強化事業にも採択されました。2021年1月に、ほり座とシネモンドで『ウルフウォーカー』をみんなで見て、その後、映画のことを話し合う「映画鑑賞ワークショップ」、子ども映画教室が16年間の中で培ってきた鑑賞のワークショップをやることになりました。ミニシアターパークの俳優さんたちと一緒に、どんなワークショップをしようかと、いま考えています。俳優さんという、映画の中にいる人と実際に会うという体験によって、子どもたちにとって、映画体験やミニシアター体験がより強く記憶に残るものになると思います。

シネモンドとしては、これからも、子どもたちを映画館に連れてくるということを積極的にやっていきたいと思っています。



シネマスコーレ | 外観

シネマスコーレ(愛知県名古屋市) | 木全純治

ミニシアターを自助努力だけで運営するのは難しい。

公的な支援が必要だと思います

今回のコロナでは、ミニシアターが、非常に多くの方から支援されているんだということを強く感じました。シネマスコーレでは、クラウドファンディングを逸早く立ち上げ、『音楽』という映画とコラボレーションしたTシャツを販売、2000枚を売り上げることができました。2ヶ月という非常に長い休館期間中は、劇場内部を整備したりして過ごし、再開後、10月には前年比の8割程に、11月には9割までお客さんが戻ってきていました。様々な支援があってここまで乗り切れたのですが、今後が大事だと感じています。やはり、公的な支援が必要になってくると思います。ミニシアターは各都道府県すべてにあるのいいと思いますが、ミニシアターのような映画館を自助努力だけで運営するのは難しいので公的な支援も必要だと思います。

ちょっと話が飛びますが、「一般社団法人映画演劇文化協会」という東宝関連の社団法人がありますが、ここが主催している「午前十時の映画祭」は、TOHOシネマズを中心にほぼシネコンだけで上映されています。「午前十時の映画祭」にはとてもいい作品がそろっているの、ミニシアターでも上映できると思います。それから、映倫という、映画館で上映する映画の審査をする機関がありますが、審査料が大体1作品30万円くらいかかります。インディペンデント映画では審査料を払うことができないものも多く、シネマスコーレの上映作品の60-70%が映倫審査を受けていません。何とか、現在の審査料の3分の1くらいで審査を行うことができないものかと考えます。諏訪敦彦監督が「フランスでは収益の10%、韓国では3%が映画税として徴収されている。その収益の1%をミニシアターにも回すシステムを日本でも作ることができれば」と非常にいいことを言われていました。国の支援も必要ですが、それと同時に支援の受け皿を確保することも非常に大事だと思います。

私たちは、いままで「自助」でやってきました。今回のコロナ禍の中で、非常に多くの方がミニシアターを本当に大切だと思ってくださっていることがわかりました。これから、政府や文化庁にミニシアターという存在をアピールし、公的な支援を求めながら、受け皿となる新しい組織づくりをしっかりと、その中で具体的な支援の形を考える必要があります。今回、ミニシアター・エイド基金では3億円が集まり、約300万円ずつが各ミニシアターに行き渡りました。年間300万円くらいの支援があれば、各都道府県にミニシアターが1館ずつくらいできるのではないかと思います。

元町映画館(兵庫県神戸市) | 林未来

文化とは「助けて下さい」と言って、
ようやく助けられるものでいいのかなと考えます

コロナによって観客動員に影響が出始めたのは、2月中旬くらいからでした。3月下旬には1日の動員が30人ぐらまで落ち込み、4月からは夜の上映をなくして時短営業にしたので、1日の動員が10人程にまで落ち込みました。このような危機的状況で、わずかでも現金を確保しなければと考えていたとき、京都みなみ会館の吉田館長から、大阪シネ・ヌーヴォの山崎支配人と私に、「支援Tシャツ」の販売をしないかと提案がありました。4月3日のお昼のことでしたが、山崎さんと「いいやん、やろ!」と返事をしたところ、その日の夕方には吉田さんからデザインが送られてきました。その日の夜、関わりのある京阪神の映画館に声がけをすると同時に、映画監督を始め、関わりのある映画関係者に応援のコメントをお願いしました。3日後の4月6日にはオンライン販売を始めました。この「SAVE OUR LOCAL CINEMAS」プロジェクトには関西地域の映画館13館が参加することになりました。

当初は「1万円ずつでも劇場に現金を入れよう、せめて5万は欲しいよね、10万は無理か」などと話していたのですが、販売初日で500万円を売り上げ、最終的にTシャツは1万3000枚を販売、寄付は5000口集まり、1館あたり280万円という驚くべき金額になりました。1週間限定の販売企画でしたが、4月12日に終了し、その翌日の4月13日からミニシアター・エイド基金が始動したという、劇場にとっては非常にいいかたちで支援がつながりました。ミニシアター・エイド基金では、約300万円の支援をいただくことができました。

元町映画館は、兵庫県の休業要請を受け、4月15日から5月29日まで約1ヶ月半、休館しました。様々なご支援のおかげで、すべてのスタッフに休館中も通常通りの給料の支払うことができました。そんな中、スタッフの石田が「自分はなにも仕事をしていないのに、支援を受けて生活ができてしまうことがすごくつらい。何か提供できるものを考えたい」といってきて、ミニシアターを応援する関西の大学団体と一緒に『アワータイム』というリモート映画を制作することになりました。これまで舞台挨拶などで知り合った俳優やミュージシャンが協力してくれて、5月12日から元町映画館のYouTubeチャンネルで配信しています。

先ほど「仮設の映画館」の話がありましたが、作品を通じて、オンラインを使ってお客様とコンタクトできるということが、私たちにとっては非常に大事だと感じました。元町映画館が営業を再開した5月30日には、再開の瞬間に立ち会おうと、何人かのお客様が、スタッフが来る前から待って下さっていました。

今回、コロナに際し、いろいろなかたちで応援していただいたことで、映画館ってどうあるべきなのかということをしごく考えさせられました。今回は「助けて下さい」と声をあげて支援を受けることになりました。私たちは映画を文化と考えて運営しています。文化とは「助けて下さい」と言って助けられるものでいいのかと考えてしまいます。今回のコロナで一番変わったのはその意識で、まちの文化施設として、まちにどう根差していくべきなのか。そして、文化なのだとしたら、やっぱり自分たちだけでなく、まちの人と一緒に守っていく、自然に守られていく仕組みを作るために何が必要なのか、いまはそのことについてずっと考えています。元町映画館は2020年で10周年を迎えました。今後10年、そのことを大きな課題としていきたいと思っています。再開後、『旅する映写機』など映画館にまつわるドキュメンタリーを制作している森田恵子監督の最新作『映写機 めぐる人生』の上映にあわせ、「街に映画館は必要なのか」というトークイベントを行い、神戸出身の俳優・鈴木宏祐さんとの企画で「これからの社会に映画館は必要か」というトークセッションをやりました。自分たちだけで運営するのではなく、お客様やまちと一緒に、映画館を続けていくかたちを探っていきたいと思っています。

最近、リモートの舞台挨拶も増えていますが、マニュアルなどがないため、準備にすごく困っています。当初は配信関連の経験が豊富な第七藝術劇場に見学に行ったり、機材のことを教えてもらったりしてやりましたが、ノウハウ共有などを、コミュニティシネマセンターでできたらすごく助かるなと思います。



上から

—
休館中に制作した『アワータイム』
元町映画館の再開の瞬間を待つ人たち



上から

豊岡劇場 | 外観
劇場ロビー

豊岡劇場(兵庫県豊岡市) | 石橋秀彦

自分たちのビジネスモデルを変革しないと生き残れないと思っています

豊岡劇場は兵庫県の北部豊岡市にあります。有限会社石橋設計が経営していて、会社の事業は他に2つあります。売り上げは前年比70%、映画単体の収益は50%になっています。3月初旬に3400万円の追加融資を受けました。ミニシアター・エイド基金とSAVE OUR LOCAL CINEMASで約600万円をいただきましたが、すでになくなってしまいました。12月半ばで残金が1900万円となっていて、これを使いながら運営している状況です。

期末は5月なのですが、前期は1万7000人に来ていただき、売り上げは2700万ほどで、単価1575円でした。今期の観客数は7000人ぐらい、1050万円ほどの売り上げになると予想しています。つまり、前期の半分にも満たない。私の劇場で上映できていたディズニー映画が公開延期・配信になったことも、売り上げが落ちた大きな要因としてあります。ワクチン接種が進んでもすぐにはもとに戻らない、早くても来年の夏と考えていますし、中堅作品も配信になっていくだろうと考えています。

そういう中で自分たちのビジネスモデルを変革しないと生き残れないと思っています。そのひとつとして私たちが考えたのがドライブインシアターです。『ボケますから、よろしくお願いします。』をドライブインシアターで上映して、結構満席になりました。そして、いま試みているのは配給です。1月にユーロスペース等で公開される『ミッドナイト・ファミリー』の配給協力をしています。

豊岡劇場の課題として、次世代への事業継承があります。また、文化的な事業として映画館経営を成立させるためのマネタイズのあり方をしっかり考えるべきだと思います。私自身は、映画館単体のビジネスではなく、複合的なビジネス事業をやっていかないと映画館は潰れてしまうと考えています。そして、私自身を含めて、自分自身がすべてをするワンマン経営から脱出しなくては行けない。今年、話題になった「やりがい搾取」はいけません。そういうことを踏まえて経営責任を明確にして、スタッフに経営能力を分散し、その責任を求めるべきだと思います。

コミュニティシネマという考え方で映画館に国の支援を求めるために、コミュニティシネマセンターはより「ポリティカル」になってほしいと思います。ある程度の政治力を持って政治的な戦略を持って支援を獲得できるようにでなければ頼ることはできません。私自身は、映画館への支援は、人口が多い都会より地方が先に行われるべきだと思います。また、支援を受けるとしても、映画館の事業内容に行政が口を出さないように、活動の自由、独立性を担保することが重要だと思います。

私の会社は、全体としては前年比7割で持続化給付金を受けることができませんでした。3割減でもいろんなダメージを受けました。とりわけ、一部の金融機関で、キャッシュフローが悪いということで融資を断られたことは、大きなダメージになりました。こういうことも変えていかないと救われない、運営を続けられないという課題に直面しながら、次のことを考えているところです。

シネマ尾道(広島県尾道市) | 河本清順

映画を楽しみにしてくださっている映画ファンがいる限り、映画館という場所はなくならないんじゃないかな

このコロナ禍の中で、全国の映画館の仲間がいることの大切さをい今まで以上に感じています。地方で劇場やっていると心細いことも多いですが、今日は皆さんの顔が見られてとても元気をもらいました。ありがとうございます。

シネマ尾道は、市民から募金2700万円を集めて旧尾道松竹を改装して2008年に開館した、現在人口13万人の尾道市で唯一の映画館です。コロナの影響は、皆様と同じような状況で、休業後一番落ちたときは、前年比80%減くらいで、現在は徐々にシニア層が動き出して10%減くらいまでお客様が戻ってきました。現在席数は50%に制限していますが、普段そんなに入らないので収益に対する影響はほとんどありません。

尾道映画と言えば大林宣彦監督です。今年4月に亡くなりました。新作の公開日に亡くられるという、最後まで映画に魂を燃やし続けた監督ですが、大林監督のおかげで『海辺の映画館 キネマの玉手箱』を、シネマ尾道では珍しく封切で上映させていただくことができて、初日には緊急事態宣言解除直後にもかかわらず、全国からたくさんのファンが詰めかけて16週間の長期上映をさせていただきました。『海辺の映画館』のおかげでお客様が戻ってきたという印象でした。

シネマ尾道では、いろいろな子ども映画ワークショップをやっているのですが、コロナの影響で今年は中止になったものもたくさんあります。クラウドファンディングなど、館独自の支援活動は特に行っていませんが、シネマ尾道の会員に入会することで支援をしてくださいと呼びかけて、たくさんの支援をいただくことができました。また、コロナの影響でリアルな形でトークができないのでリモートトークを何度も行いました。リモートは便利な一方で、地方と東京という地域格差がどんどん開いていくような、そういう印象も受けるので正直積極的にはやりたくないなと感じるのですが、そうも言っていられないのでこれからもちよこちょ続けていきたいなと思っています。

新たな取り組みとして、尾道市と共同でドライブインシアターを開催しました。尾道の風景とマッチして、とても好評でした。また、横浜シネマ・ジャック&ベティさんとミニシアター交流企画を始めます。横浜では1月に、尾道では3月に開催します。それぞれの町に関わりの深い映画を上映して、ゲストトークを行う、映画館のある町の人同士が交流するというコンセプトで開催します。皆さんも足を運んでいただければと思います。いま、全国の映画館が直面している問題に、デジタル映写機の更新があります。多くの映画館が、デジタルシネマ機を導入してちょうど10年くらいになるので、リース契約が終了し、機材が古くなって買い替えが必要になる、「第二波のデジタル映写機問題」と私は思っていますが、また大きな設備投資が必要になるという時期に、このコロナ禍に直面している映画館も多いのではないかと思います。シネマ尾道も、これからお客様が戻ってくるか、どういう状況になるかわからない中で、大きな設備投資を考えねばならず、頭が痛いなと思っています。

先日、私は全国で放映される「セブンルール」という番組に出演させていただきました。プライベート丸出しで、とても恥ずかしくて出たくなかったんですが、全国の小さな町、地域にあるミニシアターに関心を持ってほしいという思いで出演させていただきました。まだまだ、コロナ禍の影響が続き、全国のミニシアターも厳しい状況が続くと思いますが、ミニシアター・エイド基金やSAVE the CINEMA、ミニシアターパークなどミニシアターを応援しようという人たちの思いがあって、全国に映画を楽しみにしてくださっている映画ファンの方々がいる限り、映画館という場所はなくなるんじゃないかなと、私はそう信じています。

ソレイユ(香川県高松市) | 詫間敬芳

常に危機管理意識を持って

適切な解決方法を模索していくことが大切だと思います

株式会社ソレイユは、映画館をはじめて72年になろうとしています。

2020年は、3月が前年比40%減、4月は80%減、5月が50%減、そして6月から徐々に戻ってきて、12月現在は約30%減という状況です。このコロナ禍で一番感じたことは、普段から危機管理意識をもっておく必要があるということです。人生には「上り坂」「下り坂」「まさか」という3つの坂があるというのはよく言わ



上から

シネマ尾道 | 映画館入口
尾道市内で実施したドライブインシアター



ソレイユ | 外観



ソレイユ2 | 劇場内の様子

れますが、この「まさか」というのが、突然やってきて一番ダメージも大きい。そして今回のコロナに関していえば、常にその危機管理意識を持って適切な解決方法を模索していくことが大切だと思います。

映画産業は、とても不安定な産業です。コロナ禍で映画部門の資金繰りが大変厳しかったのですが、当社は、不動産を所有していて貸ビルのテナント料や駐車場収入、また、太陽光発電等の収入があったので、全体としては、比較的影響が小さくて済みました。今回のような危機に備え、可能であれば、映画だけではなく、他の安定した収入源も確保しておくことが大切ではないかと思っています。

客層の変化ですが、他のミニシアター同様、いま一番困っているのは、ご高齢のご夫婦や、常連客の方が、全く来なくなってしまったことです。とはいえ最近は徐々に回復してきています。コロナに対して正しく恐れることは大事だと感じますが、必要以上に恐れて縮こまってしまってはダメだと思うんです。というのも数日前に高松市内のシネコンに映画を見に行ったんですが、換気を重視されているからか寒くて映画に集中できないほどで、少し行き過ぎではないかなと感じました。

今後の対応につきまして、上映だけで生き残っていくのはとても大変なので、何かイベントをいろいろ合わせて付加価値をつけていこうと考えています。ホールソレイユは、4階に140席、地下1階に90席のスクリーンがあります。大体1週間に3本ずつ、計6本でやっていましたが、いまは、4階3本、地下1階4本の1週間に7本上映しています。巣ごもりで気持ちが暗くなりがちですが、なんとか映画で明るい気持ちになってほしいと、香川県の労働組合と提携して共済券を発券することになりました。ほかにも、様々なところに営業活動を広げていきたいなと思っております。



Denkikan | ロビー

Denkikan(熊本県熊本市) | 窪寺洋一

お客さんが映画館に戻ってきてくださるのか、というのが今後の課題です

熊本は4年前に熊本地震がありまして、今回緊急事態宣言で4月から5週間ぐらい休んだんですが、4年前も4-5週間休んでいまして、似たような状況になってしまいました。2020年1-2月は前年に比べると75%くらいで、これはコロナの影響が出る前で、今年はスタートから良くない興行だったんですが、2月の下旬ぐらいから、かなり急速に落ちてきて、3月はさらに10%ほど落ちて65%になり、4月は休館となり、4-5月は前年比15-20%という数字になっています。また6月以降、緊急事態宣言が終了して、再開しましたが、夜の上映などは厳しい状況が続いて、前年比の半分位という状況が続きました。夏以降にはシニア層も少しずつ戻ってきて、10-11月は邦画の調子がよく、前年比35%増となりました。12月に入って14日に熊本県のリスクレベルがうに上がり、1日の感染者数が30人ぐらいまできて、今後はまた厳しい状況になっていくんじゃないかなと思います。

感染防止対策としては、劇場の入り口に検温器を置いて体温を測ってもらって、こまめに消毒などをしており、これは皆さんと同じだと思います。補助金に関しては、経産省の持続化給付金、また熊本県の休業要請協力金10万円をいただき、ミニシアター・エイド基金からもご支援いただきました。また、雇用調整助成金の手続きもして、スタッフがやめることはなくやっています。まだチケットの電子決済や座席指定、オンライン販売のシステムが入っていないので、これを機に導入しようと、経済産業省の持続化補助金の申請をしています。第4回目の11月2日に申請をしましたが、申請者が多く、来年の2月まで結果が出ない状況です。

このコロナ禍で、大手や、ハリウッドの作品が劇場公開されないまま配信されるということがあり、懸念しています。ディズニープラスやアマゾンプライム、ネットフリックスなどの加入者も増加していますし、今後、劇場公開との関係がどう調整されていくのか、注目しています。また、お客さんが映画館に戻ってきてくださるのかというのが今後の課題です。

シネマ5(大分県大分市) | 田井肇

ミニシアター・エイド基金で作成された感謝動画を毎週見えています

ミニシアター・エイド基金には大変助けられました。ミニシアター・エイド基金で作成された感謝動画というものがありますが、シネマ5ではこれを上映していて、僕は毎週見えています。たくさんのお名前があって、何十回も見て、ようやく知り合いがいることに気づいたりします。毎週、何度見ても、音楽がいいからなのか、感動してしまうんです。名前が出てこない方も含めると30,000人ぐらいの方がミニシアターを応援してくださっています。皆さん、記憶の中にあるミニシアターへの自分の思いを、募金と支援という形にしてくれたのだと思います。

その中には、かつてあった映画館で見た映画の思い出も含まれているでしょう。たまたまいまもやっているミニシアターが、この支援の対象になっているわけですが、映画というものが、これほど多くの人たちに思われているんだと、たくさんのお名前を見ているだけで胸がいっぱいになります。死ぬときはこの映像を見ながら死ぬのが一番幸せなんじゃないか、そんな安らかな死に方ができたらそれだけで幸せだと思ったりしました(笑)。そんなことを感じながら、どうやって多くの人たちに、この先もそういった思いを抱いていただけるような仕事ができるか、そういうことをミニシアター・エイド基金の感謝動画を毎週見では、考えています。

桜坂劇場(沖縄県那覇市) | 下地久美子

映画館に来て映画を見てもらい、
心が濃厚接触している状態を感じてほしいと思います

最近はお客様と接していて、心がさびしい方が増えてきているように感じています。スタッフに話しかけてくださる方の中にも語気の強い方が増えたように感じます。先日、ワン・ビン監督の『死霊魂』の上映中に、騒音が原因で、あるお客様が後ろの席の方を殴ってしまったことがありました。心が荒んでいるなと思った出来事のひとつです。

コロナ禍に入り、ミニシアター・エイド基金などで、たくさんご支援をいただき、感謝しかないという気持ちです。多くの方が、ミニシアターに行けな代わりに寄付という形で支援してくださいましたが、やはり、映画館に来てほしいなと思っています。物理的な濃厚接触ができない中で、映画館に来て映画を見てもらい、心が濃厚接触している状態を感じてほしいなと思います。映画館を支援したいと思っていただいている方々には、友だちを誘って映画を見に来てほしいというのが、本当の気持ちです。

『死霊魂』の上映中に起こったお客様同士での揉め事は、上映中だったこともあり、劇場内のお客様全員が目撃していて一瞬、場内が騒然となりました。多分皆さん家に帰って「桜坂劇場でこんなことがあった」と家族や友だちに話されているのだらうと思ったら、それはそれで面白い映画体験だったのかなと思ったりしています。

桜坂劇場は、4月23日から5月15日まで1ヶ月近く休館しました。その期間にプロジェクターが2台壊れてしまい、その修理費もかかり、金融公庫から3000万円借りることになりました。いまはそれを少しずつ食いつぶしながら、コロナが収まったときにどうやって返していこうかと、一生懸命考えながら耐え忍んでいます。桜坂劇場では、映画上映だけでなく、音楽ライブや、市民講座、沖縄の工芸品の販売や卸事業、カフェの運営などもしています。年間の売上が2億円だとすると、映画事業の売上が1億円いくらかいかないか、50%程度で、映画以外の収益に支えられて運営が成り立っています。様々な事業を実施するため、たくさんの方にアルバイトをお願いしていましたが、5月の時点で契約を終了しました。いまは、状況がよくなりつつありますが、どのタイミングでまたアルバイトを雇用することができるのか、悩みは尽きません。



桜坂劇場 | 外観